

冠句

柴田遊児
西村吟雪 選
安居尚文

特選 衣更え 新しい夏踊り出す

大藪町 大塚 しのぶ

(評) 吹く風も匂うような若葉の季節。季節の移ろいを感じて心身共にリフレッシュ。白いブラウスに太陽の光をいっぱい浴びてサイクリング。風を切つて走る爽快感。冠題をうまくとらえている季句。
(柴田)

特選 粘り勝ち 待ちに待ったり母子手帳

東近江市 小林 清次郎

(評) やつと宿った生命の神秘。神仏のご加護と相俟つて母親になれる喜びは一人の感。真新しい手帳に生命の重みを抱き、夢と希望を胸躍らせている様子。生まれくる赤ちゃんの成長を心からお祈りいたします。
(西村)

特選 衣更え 大地の鼓動野の響き

金沢町 荒見 金一

(評) 長い冬の寒さに耐えて訪れた春に自然の新しい動きを感じる。降り注ぐ陽光に緑の芽生え、大地の躍動の息吹を新鮮に表わしている。
冠題に対しての表現を自然の動きの中での確に捉えられている。春の訪れを待ち望んでいた喜びを感じられる。忍従の冬を耐えた者が感じる喜びを。
(安居)

入選 ひとり言 料理の手が舞うちらし寿し

中敷二丁目 畑中 道

(評) 今日には鎮守の祭り。朝から厨で何やら鼻唄が聞こえている。帰省する子や孫の笑顔が見たい。母は自慢の手料理で持て成そうと勤しんでいる。きつと美味しいと言ってくれる様子が目に浮かんできます。共に離れて生活していても心は一つの家族愛。
(西村)

入選 ひとり言 弾む明日を春に問う

清崎町 柳本 和子

(評) ひとり忍耐の冬を耐えて来た者が感じた春の訪れに対する喜びがみなぎっている。春は新しい希望に満ちており、その生活の中には多数の夢が生まれて来る。
(安居)

入選 粘り勝ち 負けず嫌いの技となる

岡町 宮地 正子

(評) どんな場面でも闘志を燃やす。アスリートの基本的な心掛け。戦う前に相手の気持ちをもみ込んで圧倒する。負けて泣くより勝つて涙を拭う。きつと努力は花と咲く。
(柴田)

入選 粘り勝ち 頂点に立つ男の背

田附町 大谷 みつ子

(評) 世の中は常に平坦ではない。勝負の波が流れている。勝負は生活の中にもあり勝者になるためには世の厳しい風にさらされることもあるが、この厳しさには夢もある。厳しさに打ち勝つて切り開いた未来。その先にも新しい夢がまた育ち、また前向きに挑戦しつづけるそんな姿が見える。
(安居)

入選 ひとり言 作り笑いを返される

鳥居本町 寺村美恵

佳作 衣更え 揺るがぬ決意満身に

甲賀市 大原ふさ子

(評)

聞こえよがしに呟いてみる。お世辞なのか、皮肉なのか、相手の方もふいをつかれてこわばった笑い顔。人生の一コマ。

(柴田)

佳作 衣更え 四季の移ろい受けて生く

新海町 今堀敏子

入選 衣更え 昔ながらの障子簀に

日夏町 大菅恵美子

佳作 粘り勝ち 我慢我慢のにらめっこ

芹川町 杉浦綾香

(評)

日本の夏は高温多湿の気候。現在は各部屋毎にエアコンを設置。ひと昔前までは紙障子から葎障子に替え、簾の隙間から涼風を取り入れたり、打ち水をして避暑していました。気分は爽快。日本の知恵風流こよなく好む夏の風物詩の一コマ。(西村)

佳作 ひとり言 伝言板に話し掛け

肥田町 青木徳男

佳作 ひとり言 手足伸ばしてしまい風呂

普光寺町 河合淳子

佳作 ひとり言 星と語りて明日へ生く

蒲生郡竜王町 松瀬文恵

佳作 粘り勝ち 努力に親の愛が背に

鳥居本町 滝口寿美夫

佳作 粘り勝ち 高校球児覇者の汗

米原市 西尾辰之

佳作 衣更え 三寒四温に惑わされ

犬上郡甲良町 上野 初子

佳作 衣更え そっと見守る母心

東近江市 片岡 弘

佳作 衣更え 人里包む春の風

普光寺町 河合 仙治

佳作 衣更え 心身共にリフレッシュ

正法寺町 金子 君子

佳作 衣更え 身も心もお洒落して

稲部町 辻 昭子

佳作 粘り勝ち 王手を逃げて逆転に

長浜市 勝木 岩松

佳作 粘り勝ち 我が家の力すべて出し

城町二丁目 北村 天子

佳作 粘り勝ち ワクチン打ってマスクする

岡 町 宮地 学

佳作 ひとり言 たゞおかげさますまんなあ

葛籠町 中居 春代

佳作 衣更え 息災なりし余生かな

米原市 日比 陽子

佳作 ひとり言 「風の電話」へ語りかけ

蒲生郡竜王町 松瀬 博美

佳作 ひとり言 自己満足の影法師

東近江市 村上 定

佳作 ひとり言 笑って許せぬ愚痴のあり

鳥居本町 西川 作江

佳作 衣更え 生かされてまたお洒落する

犬上郡豊郷町 元持 和子

佳作 ひとり言 息子に聞かす父の愛

東近江市 河崎 章

佳作 ひとり言 他人に聞かれて苦が笑い

金沢町 荒見 あや子

佳作 衣更え 移り香残る袖通し

犬上郡豊郷町 西山節子



《総評》

近頃の冠句界は本来に将来の存続が心配される。同好者の高齢化と共に新しく始めようとする人が少なく、長く続かない。各地の吟社や、同人誌、月例会やそれぞれの催しにも出句者が少なく廃刊、休止に追い込まれる所が続いている。

そのひとつに冠句は書物が残されず口伝で継承されて来た為に、はじめようと勉強する人達の継^{すが}る教本のような書物が少ないため、勤めても立ち消えになる場合が多い。

その点、彦根市民文芸は毎年同じ位の出句者数で推移していてすばらしい。勿論関係者の努力と冠句の育つ土壌の賜物だろうと本来に敬意に値する。

総評ではなかったが、この企ての益々の発展を祈念して筆を置く。

柴田遊児

選者吟

ひとり言 貝の呟き泡となる

柴田 遊児

衣更え 中古住宅リフォームする

西村 吟雪

粘り勝ち 持論貫く強い意志

安居 尚文

